

特集 「アア 恥ずかしい私の 失敗談」

あわや、雪山で新幹線轢死事件

山崎邦子

“恥ずかしい”というよりヒヤリハットに近い失敗談です。今でも思い出すとゾツとし、頭に浮かぶのは「山スキーヤー、下山中に轢死!!」という新聞の見出し……。

もう10年以上前のこと、東京在住時、所属山岳会で2泊3日の吾妻連峰山スキーに行きました。バックカントリーという用語はまだあまり使われていなくて、金具もディアミールやジルブレッタが全盛期。スキーも少しずつ幅が広がってきた時で、まだ細板やカービングスキーで深雪を滑っていた頃です。

1日目と最終日は足慣らし的なコースでしたが、中日は天元台～西吾妻山～東大巔へ尾根をたどり、東大巔から北面を大沢の集落まで下る“大沢下り”へ。吾妻山の日帰り可能ルートとしては最長で、足並みが揃えば6時間ほどで踏破できます。下山後は大沢駅からJRで戻ってくるという計画でした。

メンバーは9人ほど。雪山登攀歴は長いベテランながら、山スキーはヨチヨチという山屋が数人(下りより登りの方が得意という面々)。天候は晴れから吹雪へと次第に悪化いきました。今のように技術をカバーできるほど用具の性能が良くないので、体力はあっても技術の無いメンバーは転倒しまくり(本州の山屋のスキーレベルは北海道とはかなり違います……)。また例年より雪が少なかったため、面ツルを想定していた大斜面が針葉樹のヤブルートで滑走に時間を要し、ヤブを避けているうちにルートミスをして登り返しに。そこに数名のシールトラブルも発生し、予定の時間をかなりオーバーしてしまいました。

このままでは下山が20時近くなるのは必至。でももう引き返すわけにはいけないので、一同、ヘッデン滑走を覚悟。3月だったので18時を過ぎるともう薄暗く、ヘッデンです。

19時を過ぎ、もう大沢の集落まで1時間はかからないだろうと精神的にホッとしたころ、リーダーからサブリーダーの私にあとはゴールまでトップを滑るよう指示が入りました。難所は無いものの、下るほど緩斜面になり地形も入り組んでくるので、暗い中、ヘッデンの灯りだけを頼りにルートを選んでトップを滑るのはなかなか難儀しました。

そして…遂に平坦な道へ。「やった～林道に出た! もうゴールだあ」と喜んでスケータリングで滑っていたら、私の後ろにいたメンバー達から「あれ? 道に何かあるよ」、「え? 何コレ?」、「えーっ! これ線路じゃないの!?!」と驚愕の叫び声が。「ヤバイ、やばいよ! 横に避ける、避けるー」と悲鳴に変わりました。しかし、避けようにも線路の両横が崖になっていて、すぐには降りられなかったのです。必死にスキーを漕いでやっと降りられる場所に出て、滑り降りるとそこは本物の林道……。大沢集落はひっそりと静まり返っていて民家と電柱の灯りが侘しくともっていました。無事ゴールしてスキーを脱いでいた我々のすぐ上、線路を列車が轟音を立てて通過していきました。私達が線路を避けて約10分後のことです。

一同、顔を見合わせて真っ青です。何と、それは在来線の奥羽本線を走る「山形新幹線」でした。確かこの年か前年かに開業したばかりだったはず。あのまま線路と気づかずスケータリングしていたら……「山スキーヤー、暗闇下山で轢死」。山形新聞のトップ記事の見出しはコレだったに違いありません。

最後のルート取りは私がトップで滑っていたので、何かあったら責任問題でした(私が一番最初に轢かれたと思いますが)。

暗闇の山行は様々なリスクも高まり、オーバーワークになるので思考や判断力も落ちます。ただ、この経験後しばらくは、“林道要注意”という感覚が常にあり、明るい時でも林道滑走には気をつけるようになりました。列車に限らず車に轢かれることもあるので。特に東北の山は……。その点、北海道の冬の林道は車が通らないので安心ですが。私の林道で轢死というトラウマはいつまでも消えそうにありません。